

いしづち

愛媛労災病院広報紙第17巻第4号

（通巻第86号）

2018年10月5日発行

発行人：院長 宮内文久

理念

当院は働く人々のために、そして地域の人々のために信頼される医療を目指します

基本方針

1. インフォームドコンセントの実践
2. 安全かつ良質な医療の提供
3. 勤労者医療の推進

当院では、医の倫理と病院の理念に基づいた医療を積極的に推進していくため、患者さんの基本的な『権利と責務』を、以下のように宣言します。

【患者さんの権利】

- 1) 人としての尊厳を保ちながら、良質の医療を受ける権利
- 2) 十分な説明と情報提供を受け、自らの意思で治療法の決定やセカンドオピニオンを希望する権利
- 3) 個人に関するプライバシーを保護される権利

【患者さんの責務】

- 1) 疾病や医療を理解するよう努力する義務
- 2) 医療に積極的に取り組む義務
- 3) 快適な医療環境づくりに協力する義務



平成29年10月17日 愛媛労災病院側河川敷公園にて撮影

造影剤のお話 2

病棟カンファレンスははじめました 3

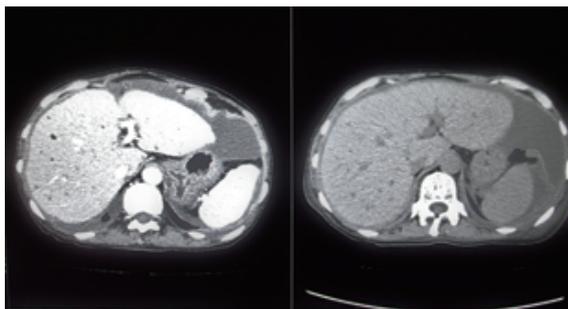
手術室紹介 3

入退院支援センター開設 4

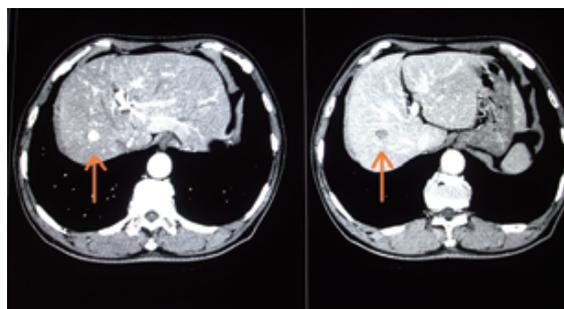
造影剤のお話

放射線科部長 篠原 秀一

放射線科は主に画像診断を担当している部署です。CT、MRI、RI等を主に読影していますが、病気を診断するのにあたってより詳しい情報を得るため、一手間をかけた方が多い事が多く、その手段の一つとして造影剤という薬剤が用いられます。これは主として静脈注射で体内に注入され、これにより画像の濃淡が強調され、読影しやすくなります。下図は左が造影されたもので、右は造影する前のものです。右の造影前では分かりづらい肝臓内の嚢胞が左の造影後で黒い点状の結節としてはっきり分かるようになっていきます。



この造影検査の中でダイナミック撮影というものがあります。主に腹部領域で用いられますが、造影剤を急速に注入することで血管内や正常組織、腫瘍の造影タイミングの違いを利用して、どのような病気があるか診断する方法となります。目的とする臓器および腫瘍の性質を考え、造影剤注入後の撮影時間を変更し、数回撮影して、その画像の差異をみて診断します。造影剤注入時に強い力が必要とされ、人力では中々困難なので、造影剤注入装置と呼ばれる機械を使って行います。造影剤が急速に静脈内に注入されるため、体が熱くなる感覚がありますが、比較的すぐに消失します。



上図のように肝臓内の結節影の造影のされ方が異なり、左では造影剤によって白く見える結節影が、右では逆に黒く見えています。この結節はHCCと言われる肝細胞癌です。この癌は周囲の正常組織より動脈の血流が豊富という性質があり、早期ではよく染まり、後期では周りが良く染まる分、相対的に染まりが弱くなり、動脈内の造影剤も少なくなることから黒く抜けて見えるようになります。

また、もう一つこの急速注入を利用して、血管そのものを描出して診断するものがあります。その一つが冠動脈CTAと呼ばれるものです。下の図の様に血管が見えます。



冠動脈はカテーテルを使って診断および治療されていますが、事前にCTで調べられる様になり大変便利になりました。

このように造影剤は画像診断に無くてはならない薬剤として、日々の診療に使用されています。

病棟カンファレンスははじめました～「できるADL」から「しているADL」へ～

作業療法士 西原 常 宏

私たちは患者さんが日常生活や社会に復帰できるように早期からリハビリを行っています。病棟看護師もケアや入院生活の中で患者さんが行える事を見守りや介助で援助しています。

少しでも早く良くなって退院できるように、訓練場面でできるようになった動作を病棟でも安全にできる動作（している動作）に繋げるために、各病棟で週1回リハビリのスタッフと看護スタッフでカンファレンスをはじめました。まだ開始して期間は短いものの、双方の思いや訓練時と病棟での違いなど新たな気づきもあり、良い情報交換の場をもつことができていると感じています。

その他、不必要な寝たきりを作らないことや、

転倒しにくいベッドまわりの工夫を看護師と協働して行っています。今後も多職種と連携し、信頼される医療を目指していきます。



手術室紹介

師長補佐 秋 月 渚

手術室は、看護師長・師長補佐を含め13名で、平均年齢43歳のベテラン看護師が揃っています。整形外科・婦人科手術を中心に、日々の予定手術や、緊急・時間外手術もスムーズに対応しています。

平成28年度より周術期看護の質向上を目的とし、術前看護外来を行っています。整形外科・婦人科の手術を受ける患者さんを対象に、入院前から患者さんに関わる事で、患者さんの手術に対する不安軽減を図っています。

また、患者情報をもとに、術前アセスメントを行い、術前オリエンテーション、術後疼痛について説明や、禁煙指導、口腔ケア等の患者教育を行っています。手術決定時の外来から術前・術後を通して患者さんに関わることで、患者さんに寄り添った看護を提供できるように努めて

います。また、外来・病棟との連携を図ることで、一貫性のある看護の提供に繋がっています。

手術室看護師をこれからもよろしくお願ひします。



入退院支援センター開設

外来看護師長 大山 淳子

9月3日より「入退院支援センター」を、正面玄関横に開設致しました。ここでは、新たな取り組みとして、入院決定時から患者さんやご家族を多職種で協働して、安全で安心して入院できるように支援させていただきます。そして患者さんの情報を病棟等と共有して、急性期治療が終わった患者さんが、退院してからも継続的な治療や在宅療養ができるように、医療サービスや介護サービスにシームレスに繋いでいくことを目的としています。



<具体的な入院支援の活動内容>

*外来看護師が行うこと

- ① 身体的・社会的・精神的背景を含めた患者把握
- ② 入院前に使用していた介護サービス又は福祉サービスの把握
- ③ 入院中に行われる治療・検査の説明
- ④ 入院生活の説明
- ⑤ 退院困難な要因の有無の評価
- ⑥ 褥瘡に関する危険因子の評価
- ⑦ 栄養状態の評価
- ⑧ 服薬中の薬剤の確認

*医事課職員が行うこと

- ① 入院生活や事務手続きの説明



その他必要があれば、薬剤師・管理栄養士・理学療法士・作業療法士・MSWなど多職種で対応していきます。

また、現在病棟中心に行っている退院支援を、今後入退院支援センターを活用し、少しでも地域の関係者の方々に、利用しやすい場が提供できるようにと考えています。

当院の理念にある「地域の人々のために信頼される医療を目指します」をモットーに活動を進めていき、地域との連携が、今後更に深まるように取り組んでいきたいと思ひます。

